



# 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と海外の中東・イスラームコレクション

東長 靖

一九九八年に設立されたアジア・アフリカ地域研究研究科は、二〇〇九年に改組され、既存の東南アジア地域研究専攻・アフリカ地域研究専攻に、新たに「グローバル地域研究専攻」を加えた三専攻体制となった。この新専攻のなかには、「イスラーム世界論講座」が独立した講座として設けられ、中東地域研究およびイスラーム研究を推進している。また、同時に設けられた「南アジア・インド洋世界論講座」とも協力しつつ、南アジア・イスラーム研究にも積極的に取り組んでいる。

また、イスラーム地域研究センターが二〇〇六年に研究科附属センターとして設立され、人文科学研究機構（NIHU）プログラム「イスラーム地域研究」と文部科学省委託事業「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」（イスラーム地域研究

拠点）を遂行しつつあり、他方、人文科学研究機構（NIHU）プログラム「現代インド研究」を主導すべく、二〇一〇年には研究科附属現代インド研究センターが設立された。

そこで本稿の前半部では、本研究科の有する文献の内、現地語コレクションについて、中東を中心にしつつも南アジアにも目を配りながら述べてみたい。ちなみに後半部では、研究科を離れて私個人が海外で利用する図書館について紹介する。

## ●アジア・アフリカ地域研究研究科の現地語コレクション

イスラーム研究、なかんずくイスラーム思想研究においては、アラビア語が何よりも重要である。聖典『クルアーン』（コーラン）がアラビア語で語られていることに端的に象徴されるように、アラ

ビア語こそはアッラーの選んだ言語なのであった。アラビア語の学術に占める位置は、ヨーロッパ中世におけるラテン語や前近代東アジアにおける漢語とほぼ同様に、圧倒的であった。本研究科では現在、約二万七〇〇〇冊のアラビア語書籍を有しているが、これは全国の公共図書館（大学図書館やアジア経済研究所図書館、東洋文庫など）に存在する五万冊余のアラビア語書籍群のほぼ半数を占める。

内容的には、イスラーム教徒が常に立ち返るべき典拠となる聖典、すなわちクルアーンや預言者ムハンマドの言行録（ハディース）への注釈をはじめとし、神学・哲学・スーフィズム（イスラーム神秘主義）といった「内面的学問」と、法学を中心とする「外面的学問」の両方に関する文献群である。後

者には、現代のイスラーム経済や

中東現代政治に関する大量の書籍が含まれている。

イスラーム世界が七世紀にアラビア半島の版図を越えて拡大していくにつれ、アラビア語に続いてペルシア語・トルコ語といった言語が、イスラーム世界の学術語として重要になってくる。本研究科では、約九〇〇冊のペルシア語と、約三二〇〇冊のトルコ語を所蔵している。これらはいずれも、スーフィズム文献を核としているが、トルコ語に関しては、中近東文化センターの高橋忠久氏のご寄贈を受けてギルド関係・経済関係の書籍も充実することとなった。

南アジア・イスラーム世界で用いられる学術語はいくつかあるが、その代表例としてウルドゥー語を挙げる事ができるだろう。これについても、本研究科は現在約一七〇〇冊ほどの文献を有している。イスラーム関連図書を中心としつつ、文学や政治に関わる文献も相当数入っている。

本研究科のこれらの現地語コレクションの特徴のひとつは、ほぼ全件の登録情報をOPAC上に公開するとともに、数少ない例外を除いて他機関への貸し出し（ILL）を行っている点である。日本でここにしかない資料も少なくない

いので、ぜひ日本中の研究者に、有効に利用していただきたいと願っている。

ちなみに、ここで取り上げた諸言語は、すべてアラビア文字で書かれている。したがって、その整理も容易ではない。その状況を打開するために、「アラビア文字図書DB(データベース) 連絡会」が継続的に開催されている。その成果は、柳谷あゆみ編『日本におけるアラビア文字資料の所蔵及び整理状況の調査』(NIHUプログラム・イスラーム地域研究・東洋文庫拠点、二〇〇九年)や、連絡会の活動記録である左記URLで見ることができる。

[http://www.bias.jp/report\\_association.html](http://www.bias.jp/report_association.html)

### ●海外の中東・イスラーム

#### 関連コレクション

イスラーム世界の研究に資する図書館・コレクションは、世界中に存在する。日本で見つけることのできるカタログだけを頼りに、海外の図書館に手紙を書いて写本を取り寄せていた時代は終わりを告げ、私たちも学生たちも、あるいは直接現地へ赴いて、あるいは自分の部屋からインターネットを通じて、文献を請求したり、閲覧

したりすることができるようになってきた。

インターネットが便利な道具であることは言うを俟たないが、地域の理解のためには、やはり現地を實際に訪れてみなければならぬであろう。そこで、人文社会科学系を中心に、海外で実地に文献調査を行う際の手引きとなることを目指して作成したのが、「海外文献調査ガイド」(小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、二〇〇八年所収)である。ここでは、中東のみならず、イスラーム世界全域および旧宗主国の主だった約三〇カ国を取り上げ、各国の主要な図書館の特徴や利用条件・利用方法を説明してある。同時に、必要に応じて、ビザの取得法などの情報も記してある。全体の企画立案は私が行ったが、各国の情報執筆には、それぞれの国の研究状況に詳しく、なおかつ近年も頻繁に現地で文献調査をされている研究者の方々にあたっていた。私自身、二〇一〇年に三回、中東の国々を訪れる機会があったが、その都度該当する国の情報をコピーし、持参して、文献調査に役立てることができた。その内のひとつ、チュニジアには、

一週間足らずしか滞在できなかったが、この海外文献調査ガイドのおかげで効率的に調査を進めることができ、ある図書館で思わぬ掘り出し物に出くわして、ほくほくしたものである。

ところで私は、この十年来、毎月ほど過ごすことにしている。この滞在期間中はウィークデーも毎日図書館に通い詰めているが、そういった図書館のなかでも別格なのが、オスマン帝国の遺品を受け継ぐスレイマニエ図書館である。

本館だけで六万五〇〇〇点以上の写本を有し、さらに四つの別館をも有するこの図書館は、イスタンブル旧市街の中心部に位置している。以前は、利用許可ひとつとるのも、首都アンカラからの裁可を待たなければならず大変だったが、今は大変使いやすくなった。開館時間も、朝の八時半から夜の一時までと、ちよつとしたコンビニエンス・ストア並みである。

かつては、図書館の廊下に置かれたカードを一枚ずつ繰って目当ての写本を探し出しても、一回に一点ずつしか請求できず、それを返却しないとつぎの写本を見せて

もらうことはできなかった。しかし二一世紀に入ってから図書館は劇的に変革を始め、とうとう二〇〇九年までには、別館の分も含めて所蔵する全写本をデジタル化するに至っている。現在われわれが閲覧室に入つてすべきことは、そこに置かれたコンピュータで写本を検索し、ヒットしたらそれをクリックするだけである。写本の最初から最後までがきれいに撮影されて、画面上に現れる。何点閲覧するのも自由だし、入用の写本については至極簡単な手続きでCD-ROMに複写してくれるようになった。欧米のレベルに近づきつつある、と評してよいのだろう。しかし古い時代を知る人間としては、一抹の寂しさをぬぐえない。今では、写本自体は滅多なことでは見せてくれなくなつてしまったのである。写本独特の匂いと手触りを感じながら、何世紀も前の著者や書写生や読者たちに想いを馳せる喜びは、半永久的に失われてしまった……。

(とうなが やすし/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)